

序論

○研究目的

都市は如何にして記述されるだろうか。「空間論的転回」¹の後、新しい空間論の認識論的理論を適用して都市の記述が試みられてきた。アンリ・ルフェーヴルは「空間論的転回」を先導した論者たちに多くの影響を与えた思想家である。

ルフェーヴルは『空間の生産』²でよく知られているが、その出版以降も思考を発展させ続け、『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』(以降『リズム分析』とする)³も死後に出版されている。

今日における都市空間の記述の試みでは、『リズム分析』からの部分的なアイディアの借用は見られるものの、その意味の大半は『空間の生産』に引っ張られ「身体」と「空間」の関係として捉えられがちである。『リズム分析』の文献を通じた読解と分析が不十分であることは否定できない。

したがって、本研究は文献の史料価値の再検討を目的として掲げ、都市空間研究における史料の位置付けを再定義し、ひいては「リズム分析」と「都市空間の記述」の関係を今一度考察する。

○研究方法

まず、日本に未紹介の『Éléments de rhythmanalyse: Introduction à la connaissance des rythmes』を読解するにあたり、翻訳作業の必要があり、これは筆者が独自に進めるものとする。

本研究の目的を達成するための読解方法には大きく二通りの理解が必要である。一つは文献がどのような視座から書かれ、都市空間研究の中でどう位置付けられるか、もう一つは『リズム分析』の精読によって明らかにする文献の内容理解である。

前者の理解についてはルフェーヴル自身の思想的影響関係を明らかにする(第一章)。後者は翻訳した文献の読解を行い、内容と構成を詳細に明らかにし(第二章)、把握した内容からリズム分析の様式と構造を分析する(第三章)。そして、以上をふまえてリズム分析と都市空間の記述の関係について考察を行う(第四章)。

○既往研究

- ・エドワード・W・ソジャ『第三空間』(青土社,2005)
- ・デヴィッド・ハーヴェイ『ポストモダニティの条件』(青木書店,1999)
- ・イアン・ボーデン『スケートボーディング、空間、都市 - 身体と建築 -』(新曜社,2006)
- ・菅野拓「都市空間をいかに記述するか - 「見る者」か「遊歩者」か、それとも? -」(都市文化研究 vol.13, 2011)
- ・上野俊哉「リズム・ダンス・ミメシス」『都市/建築クロニクル 1990-2000』(10+1, (19), pp. 53-220, 2000)
- ・南後由和「笑う路上観察学会のまなざし - 都市のリズム分析へ向け -」『特集 街路』(10+1, (34), pp. 63-198, 2004)

○本研究の位置付け

既往研究はルフェーヴルを引用し「都市空間の記述」を試みているが、ほとんどが『空間の生産』と『リズム分析』における空間のコンテクストを合わせて議論しているといえる。本研究は其中で『リズム分析』に焦点を当て、読解と分析によって見出せる「都市空間の記述」との関係性を考察する。

本論

第1章 『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』基本情報

■アンリ・ルフェーヴル (1901-1991)

フランスの哲学者。マルクス主義思想家であり、最も多作な人物として知られている。主な著作に『弁証法的唯物論』(1953)、『日常生活批判』(1947)、『都市革命』(1970)、『空間の生産』(1974)などがある。



図1: アンリ・ルフェーヴル

『空間の生産』は「空間論的転回」の先駆けとなった重要書。生涯をかけてマルクス主義の発展に取り組んだ。

『リズム分析』は彼の死後1992年に友人ルネ・ルローによって出版されたルフェーヴルの遺作である。

■書誌情報

原著:

Henri Lefebvre, Catherine Regulier-Lefebvre 『Éléments de rhythmanalyse: Introduction à la connaissance des rythmes』(Ed. Syllepse, Collection "Explorations et découvertes", Paris, 1992)

英語版:

Stuart Elden, Gerald Moore trans. Henri Lefebvre 『Rhythmanalysis: Space, time and everyday life』(Continuum, New York, 2004)

2018年現在、未邦訳となっている。



図2: アンリ・ルフェーヴル『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』

■思想的位置付け

まず、大きく分けて空間論的影響は主にマルクス⁴(そしてヘーゲル⁵)、時間論的影響はニーチェ⁶からきている(弁証法の「第三者による媒介によって思考するマルクス主義者のルフェーヴル」ではなく、「常に第三者が存在する」という開かれた運動として思考を展開している)。

「身体」と「空間」の関係が論じられた『空間の生産』に対し、「空間」と「時間」の結節点としての位置を「身体」に与え様々な分析を行う『リズム分析』は、時間論的位置に置かれることが分かる。

「時間」の概念への影響はブルースト⁷、ニーチェ、バシェラール⁸からきていて、ベルグソン⁹は批判の対象とし、またマルクスの「時間」の概念とは異なっている。

従ってルフェーヴルはマルクス主義の「空間論」的側面に貢献するだけでなく、『リズム分析』によってマルクス主義の「時間」の拡張を行ったことが指摘できる。

目次構成

1. 事物批判
2. リズム分析者：未来の描写
3. 窓から眺めて
4. ドレサージュ
5. メディアの日
6. 時間の操作
7. 音楽と諸リズム
8. 結論(概要)

第2章 『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』読解

本章では『リズム分析』の全文を翻訳・読解することによって、文献の全貌を明らかにした。

ルフェーヴルは「リズム」という概念を介して「身体」を「空間」と「時間」と関係させ、「空間」と「時間」を別個に、かつ同時に考えることを可能にしている。

『リズム分析』において「空間-時間-エネルギー消費」の関係があるところには必ずリズムが存在する、というルフェーヴル自身の指摘を証明するがごとく、文献を通して様々な分野を横断して「リズム分析」を行う。事物、都市、政治体制、メディア、資本、そして音楽…。

ここで指摘すべきは、異なる分野の「リズム分析」を同一の「身体」が行えるということである。よって異なる分野の「リズム」は共存していて、その関係において「身体」はあらゆるものに対して多角的な分析ができることが示唆されている。

第3章 ルフェーヴルのリズム分析

■身体のリズム

前章で明らかにした『リズム分析』の全貌をふまえ、リズムの平面を大きく「空間」「時間」「動作」「反復」そして「身体」の五要素から仮定した。「身体」を除いた四要素は「身体」を媒介としてリズムを生成し、相互関係を作り出す。

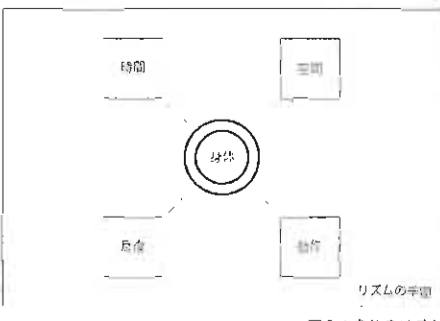


図3: 身体のリズム

■諸リズムの分析

また、その平面が複数「束ねられた」ものが「身体のリズム」を構成し、その「リズム」を基準とすることで様々な「諸リズム」の分析が可能であり、かつ「諸リズム」は共存可能であることを示した。

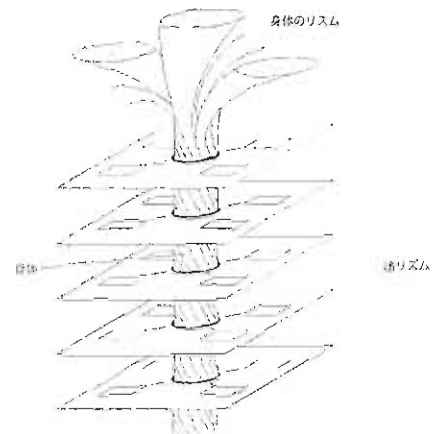


図4: 諸リズムの分析

★「身体」の内外におけるリズムは相互作用の関係にあり、互いに影響しあうということである。ルフェーヴルは、リズム分析者は身体を単に主体として分析するのではなく、後続する調査の手段として、身体を分析の最初の指標とすると指摘している。身体はメトロノームの役割を担う。これが「リズムの分析」ではなく「リズム分析」とする所以である。ルフェーヴルは身体から議論を始めることによって、「政治的かつ哲学的な大勢が目指したが届かなかった(具体的な)普遍性に達する」¹²とも指摘している。

訳注 1 現代の都市や社会の構造やそれを貫く原理も、空間をめぐる社会的な結節点とそれを貫く原理として捉えようとする「空間論」的な問題意識。 2 アンリ・ルフェーヴル『空間の生産』(青土社,2006) 3 Henri Lefebvre, Catherine Regulier-Lefebvre 『Éléments de rhythmanalyse: Introduction à la connaissance des rythmes』(Ed. Syllepse, Collection "Explorations et découvertes", Paris, 1992) 著者訳 4 カール・マルクス、独の哲学者・思想家。ルフェーヴルはマルクス主義者であり常に「生産」の概念について影響を受けている。5 ケンダル・ヘーゲル、独の哲学者。9世紀時評者。6 フリードリヒ・ニーチェ、独の哲学者。変化と循環の時間認識について影響を受けている。7 マルセル・ブルースト、仏の小説家。聖印と記憶、善徳と反逆について影響を受けている。8 カストン・バシェラール、仏の哲学者。空間論について影響を受けている。9 アンリ・ベルグソン、フランスの哲学者。時間論の連続性についてバシェラールから批判され、ルフェーヴルもこれは引用する。10 干渉和の巻、両陣の対峙をもたらしリズムだとされている。11 20世紀前半にフランスをほはじめとしたヨーロッパにおいて美術・文化・社会・政治・日常生活の統一的批判・発展を促した運動。

第4章 考察

■リズム分析と都市空間

『リズム分析』において、ルフェーヴルは身体を基準として様々な要素を分析対象とし、リズム分析を行った。その中でも、特に第三章「窓から眺めて」では都市の中で体験する経験的なリズムが明瞭に記述されているが、都市(あるいは同等の社会権)の記述は他の形でも『諸要素』のリズム分析を通して偏在しているようである。

リズム分析における都市空間の分析とその記述は必ず身体による「空間の生産」を伴っている。しかしこれは逆説的に、(リズム分析の同一平面上にあるため自明ではあるが)「空間」と「身体」の相互関係のみでは都市の記述はできないことも示している。

従って都市空間の記述において『リズム分析』は「空間」と「時間」によって構成される「社会的状況」にリズムを通して「身体」を関係させ、それによって「都市」の分析を可能にしているのである。

■リズム分析の展望

ルフェーヴルは不規則なリズムの全て、つまりアルリズム¹⁰は混乱をもたらし、それらは発明や創造によって埋められるとする。このアルリズムをつくりだすのは「差異」であり、「差異」をつくるのは「反復」である。

『リズム分析』第一章「事物批判」の初めに定義される「差異」である。ルフェーヴルはこの「差異」をつくり出す能力が、「身体」が持つ特異性だとしている。

したがって、特定の社会状況におけるこの「身体」による「空間」の生産が革命や発明といった人類の前進の展望になるとしているのである(その例としてシチュアシオニスト¹¹の実践が挙げられる…)。

結論

第1章では、思想家アンリ・ルフェーヴルの思考における影響関係を把握し、『リズム分析』の都市空間研究における位置付けを明らかにした。これにより『リズム分析』がマルクスの空間論、ニーチェ的時間論の視座から論じられていることが分かった。

第2章では、『リズム分析』の全文を翻訳・読解により、文献の全貌を明らかにした。これにより「リズム分析」の様式として、「時間」と「空間」を別個にかつ同時に考えさせることや多分野に渡る「リズム分析」の可能性が確認できた。これらを分析対象として次章につないだ。

第3章では前章で確認した「リズム分析」の様式をふまえ、その構造を分析した。「身体」を媒介とする「空間」「時間」「動作」「反復」の相互関係によって構成される平面を「リズム」として仮定した。またその束を「身体」とし、「リズム分析」の構造の分析を試みた。

第4章では、以上の3章をふまえ、リズムと都市空間の記述の関係、都市空間に対しリズム分析が示した展望について考察し、ルフェーヴルの「リズム分析」は時間論として、空間論である『空間の生産』と合わせて用いられることで、都市空間の記述に特に有効であることが確認できた。

目次構成

■序論

はじめに

研究目的

研究方法

既往研究

本研究の位置付け

■本論

1 『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』基本情報

1-1 はじめに

1-2 書誌情報

1-3 著者紹介

1-4 思想的位置付け

1-5 小結

2 『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』読解

2-1 はじめに

2-2 読解とまとめ

2-2-1 「事物批判」

2-2-2 「リズム分析者：未来の描写」

2-2-3 「窓から眺めて」

2-2-4 「ドレサージュ」

2-2-5 「メディアの日」

2-2-6 「時間の操作」

2-2-7 「音楽と諸リズム」

2-2-8 「結論（概要）」

2-3 小結

3 ルフェーヴルのリズム分析

3-1 はじめに

3-2-1 身体のリズム

3-2-2 諸リズム分析

3-3 小結

4 考察

4-1 リズム分析と都市の記述

4-2 リズム分析の展望

■結論

結論

謝辞

参考文献

図版出典

■巻末資料

アンリ・ルフェーヴル『リズム分析の諸要素：リズム分析への序説』

日本語訳版（筆者訳）

参考文献

Lefevvre, Henri "Rhythmanalysis-Space, time, and everyday life-" (Bloomsbnry, 2004)

Lefebvre, Henri『空間の生産』（青木書店, 2000）

Lefebvre, Henri『都市革命』（晶文社, 1974）

アンリ・ルフェーヴル『都市への権利』（筑摩書房, 2011）

アンリ・ルフェーヴル『マルクス主義の現実的諸問題』（現代思潮社, 1975）

カール・マルクス『資本主義的生産に先行する諸形態』（大月書店, 1963）

イアン・ボーデン『スケートボーディング、空間、都市－身体と建築』（新曜社, 2006）

エドワード・W・ソジャ『第三空間』（青土社, 2005）

デヴィッド・ハーヴェイ『ポストモダニティの条件』（青木書店, 1999）

ガストン・バシェラル『空間の詩学』（ちくま学芸文庫, 2002）

イーファー・トゥアン『空間の経験』（筑摩書房, 1993）

「特集 街路」(10+1, (34),pp. 63-198,2004) .

「都市／建築クロニクル 1990-2000」(10+1, (19),pp. 53-220,2000) .

ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション1』（筑摩書房, 1995）

ルネ・コルブシエ『S. M. L. XL+』（筑摩書房, 2015）

Le Corbusier『輝く都市』（鹿島研究所出版会, 1968）